

『明星』時代の藤島武二

—ミュシャとの関わりと《画稿帖》について—

児 島 薫

はじめに

藤島武二が1900年代前半に、雑誌『明星』の表紙絵、挿画をはじめ、鳳（与謝野）晶子『みだれ紙』（東京新詩社、1901年）などの装幀、挿画制作に新機軸を開き大きなインパクトを与えたことについては、従来より近代文学研究、近代美術史研究のなかで高く評価されてきた。2002年の「藤島武二展」¹では藤島による『明星』の挿画に関連する素描や鳳（与謝野）晶子『みだれ髪』（東京新詩社、1901年）、与謝野晶子『小扇』（金尾文淵堂、1904年）、与謝野鉄幹、晶子『毒艸』（本郷書院、1904年）などの装幀本、また川上瀧彌、森廣『はな』（1902年初版）を取り上げ、以前の回顧展よりもこれらの仕事を重視した。2017-8年の「生誕一五〇年記念 藤島武二展」²では、「グラフィック・デザインの先駆者」としてさらに雑誌表紙絵や絵はがきを展示し、藤島の画業のなかに位置づけた。これまでも藤島のこうした印刷関連の仕事は、日本におけるアール・ヌーボーの受容としてアルフォンス・ミュシャと関連づけて語られることが多かったが、2019年の二つの展覧会「みんなのミュシャ ミュシャから漫画へ一線の魔術」（Bunkamura ザ・ミュージアム、他、2019-20年）、「ミュシャと日本、日本とオルリク」（千葉市美術館、他、図録・国書刊行会、2019年）ではミュシャの作品と日本の出版物を比較するなかで藤島作品を比較的大きく取り上げている。

こうした状況を踏まえ、藤島武二が雑誌『明星』に関わった時期の「版」の仕事について、これまでどのように論じられてきたのか、今一度整理をしたい。また、藤島のそうした仕事を考える上で新たな手がかりとなるのが、《画稿帖》（個人蔵）である。これは藤島の過眼録とも呼べるような冊子であり、主に海外のデザイン画、イラスト、雑誌表紙絵、ポスターなどを縮図模写した図がぎっしりと描かれたものである。これについてはこれまでも一部が紹介されており、筆者も最近の拙著のなかで少し述べたが、あらためてその内容を詳しく紹介する。

1. 『明星』の仕事

雑誌『明星』は与謝野鉄幹が1900年に創刊した文藝誌であるが、西洋美術の紹介をし、白馬会展の批評を載せるなど白馬会との関係の深さにおいても知られている。匠秀夫「雑誌『明星』と近代美術」は文学と美術との関わりについて深く論じた基本文献であり、以後雑誌『明星』と美

術についての研究は数多いが、藤島武二に関わる主なものとしては次のとおりである。以下、本文ではこの文献番号を示して述べていく。

- ① 匠秀夫「雑誌『明星』と近代美術」『近代日本の美術と文学—明治大正昭和の挿絵』木耳社、1979年、p.41-277。（初出：『札幌大谷短期大学紀要』Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、1964、65、67年）
- ② 芳賀徹『みだれ髪系の系譜 詩と絵の比較文学』美術公論社、1981年。
- ③ 小池智子「版画という語—「版画」概念についての一考察」、青木茂監修、町田市立国際版画美術館編輯『近代日本版画的の諸相』中央公論美術出版、1998年、p.249-268。
- ④ 河野実「版の絵から絵画への萌芽—刀画《漁夫》をめぐる—」『近代日本版画的の諸相』、p.269-290。
- ⑤ 山田悦子「『明星』の挿画」『近代日本版画的の諸相』、p.374-380。
- ⑥ 栗田聡子「『明星』に紹介された西洋美術について」『近代日本版画的の諸相』、p.381-406。
- ⑦ 栗田聡子・山田悦子編「『明星』図版目録」『近代日本版画的の諸相』 p.407-494。
- ⑧ 木股知史『画文共鳴 『みだれ髪』から『月に吠える』へ』岩波書店、2008年。
- ⑨ 岩切信一郎『明治版画史』吉川弘文館、2009年。
- ⑩ 森 登「藤島武二の版画図版と『はな』（1）銅・石版画遺文70」『一寸』74号、学藝書院、2018年6月、p.67-76。
- ⑪ 森 登「『はな』—初版から五版 銅・石版画遺文71」『一寸』75号、学藝書院、2018年9月、p.69-78。
- ⑫ 児島薫『女性像が映す日本 合わせ鏡の中の自画像』ブリュッケ、2019年4月。

まず『明星』の挿画についての基本的な情報を確認しておこう。これについては④と⑦を参照しつつ、原本や復刻版『明星』によった。『明星』発刊は1900年4月1日。5号まではタブロイド判で3号からは表紙右上に長原孝太郎による天使がたいまつを持つ絵の「明星」と題字が付いた。参加画家は一條成美、結城素明、長原孝太郎（止水）が中心である。6号から四六倍判の冊子形態となり表紙には一條による裸婦が百合の花を持つ絵があしらわれた。彫刻は木村徳太郎。7号、8号は一條の挿画がそのほとんどを占め、専属画家の印象を与える。また7号にはエミール・オルリクによる蔵書票が4点紹介される。8号（1900年11月27日）はよく知られているようにフランス、サロンの絵画から裸婦の絵の模写を掲載したことから発禁処分を受ける。9号は表紙などを省略した簡素な冊子であり、1901年1月1日発行の10号から体裁は旧に復するが、巻頭に藤島武二による雄牛の絵、ツバメをデザインした欄画が登場する。11号からは藤島が表紙絵を担当し、12号は藤島の挿画がほとんどとなる。

鉄幹による「一筆啓上（社告）」は6号では黒い太い円の中に「明星」「一筆啓上」の字を配している。また「雁来紅」という晶子らの歌を掲載したコーナーのタイトルは7号では「清怨（新詩社詠草）」となるが、これらにはアルフォンス・ミュシャによるサラ・ベルナールの1896年のポスターを模して改変したような図が付けられる。また巻末の「一筆啓上」（図1）にもミュシャの《サロン・デ・サンでのミュシャ作品展ポスター》（1897年）を部分的に改変しているものの全体はほぼそのまま引き写した図を付けている。森 登氏が引用しているように、鉄幹は「本号（7号・筆者註）『明星』の挿画には一條君苦心の作多く、従つて彫刻も亦、頗る木村〔徳

太郎] 翁を悩ましめ候」(文献⑩ p.71) と述べており7号までは《可憐》のような一頁大のものを含め、一條が多く挿画を描いている。

藤島が巻頭を飾った10号では、やはり森氏が指摘しているように、鉄幹が「一筆啓上」欄のなかで「◎本号以下毎号の挿画は長原止水、藤島武二両君に於て主として健筆を揮はれ候ことに相成り候」とあり、藤島の参加が正式に表明される。

さて、ミュシャの図柄を写した2つのカットについては、筆者の記載が無い。また10号以降の藤島武二の記名のある挿画にミュシャを模したものは無い。しかし藤島武二の挿画についてはミュシャとの比較がよくおこなわれてきた。藤島武二とアール・ヌーボー、あるいはアルフォンス・ミュシャとの比較に関する美術史の論文の主なものを以下にあげる。

- ⑬ 島田紀夫「アルフォンス・ミュシャと日本」『アルフォンス・ミュシャ展』横浜美術館、他、1983年、p.159-161。
- ⑭ 島田紀夫「アール・ヌーヴォー、『明星』、晶子」『アール・ヌーヴォーの華—アルフォンス・ミュシャ展 美しき出会い—与謝野晶子とアール・ヌーヴォー展』ドイツ文化事業室編集、堺市博物館、1994年、p.248-251。
- ⑮ 児島薫「藤島武二とアール・ヌーボー—『ラ・プリュム』との関わりについて」『鉄幹と晶子』6号、2001年4月1日、p.50-61。
- ⑯ 三谷理華「日本ミュシャ事始め—白馬会周辺から」みんなのミュシャ ミュシャからマンガへ—線の魔術』Bunkamura ザ・ミュージアム、他、日本テレビ放送網、2019年7月13日、p.164-165。
- ⑰ 井上芳子「ミュシャと日本をめぐる一考察『明星』周辺のアール・ヌーヴォー受容について」『ミュシャと日本、日本とオルリク』国書刊行会、2019年8月25日、p.284-288。

島田紀夫氏が⑬で指摘するように、藤島とミュシャをおそらく最初に関連付けたのは、石井柏亭であり『画壇是非』のなかで次のように述べている³。

「『明星』の挿画や表紙もこの時代に頻りに造られてをり、三十五年の第二明星の表紙には一九〇〇年頃の仏蘭西で一時流行したムッシャ式図案の感化が示されもしたが、(一條成美も同様ムッシャの追随者であつた) 藤島は間もなくそれを脱却して彼独自のものに推移した(中略) 与謝野寛晶子共著の『毒草』の表紙と挿画とは傑作の方であつたが、パステルを以てした原図を彫る伊上凡骨の骨折も相当なものであつた。」

このように石井はミュシャの名前を出して「一條成美も同様ムッシャの追随者であつた」としている。藤島もミュシャの追随者であつたと読みとれるが、一方で「仏蘭西で一時流行したムッシャ式図案」という言葉は、もう少し広くアール・ヌーボー・スタイルの図案を意味しているようでもある。

また、匠秀夫①も引用しているが、これより以前、1934年に出版された藤島の豪華画集に寄せた文章でも柏亭は、次のように述べている。「幾年かに亘つた『明星』の表紙図案と、木版石版によつての挿絵と、与謝野夫妻の合著『毒草』の表紙挿絵と、何れも当時の少壮文人を悦ばしめたものである。其なかには1900年頃に流行したムッハの図案から学ばれたものもあるにはあるが、先生独創の部分も決して鮮少ではなかつた」⁴。ここではミュシャに学んだことを述べつつ

も藤島の独創を指摘している。

石井が藤島とミュシャを結びつける記述を残していることと、ミュシャを模した挿画が『明星』6号から掲載されたことが結びついて、作者の記載のない「一筆啓上」(図1)や「雁来紅」の図の作者について、藤島ではないかと推察することになった。文献①、②では特にこれらについて触れていないが、島田氏は⑬で「一條成美か藤島武二の手になる可能性も考えられるだろう」(p.161)とやや慎重に述べている。拙稿⑮では藤島が作者であることを前提に『ラ・プリウム』との関わりを論じてしまったことを反省する。また⑦でも作者を「藤島武二か」としている。しかし森氏は⑩のなかで先に引用した鉄幹の言葉などから8号までは一條の担当であったことを前提に「一條の描いた第六・七号の「Miyoyo」及び「ミヤウジヤウ」のタイトルを附したミュシャのポスター模画の図案やその他のカット類は、十号以後も版を流用して使用されている」(p.72)と述べて作者を一條としている。筆者もその後⑫のなかで、これらのミュシャの模画に用いられているやや神経質なほどに繊細な細い線描や目の描写には一條の筆致との共通点がみられる一方、藤島の均一に力の入った描線とは異なることを指摘し、やはりこれらは一條によるものではないかと延べ、藤島説を訂正した。

「みんなのミュシャ」展、および「ミュシャと日本、日本とオルリク」では、これらの『明星』6号、7号の挿画も展示しているが、キャプションでは作者を「一條成美」としており、一條説が今後定着するものと思われる。ただし、繰り返しになるが作者の記載が無いためやはり推測に留まる。

なお、この展覧会では仏蘭西の文藝誌『ラ・プリウム』のミュシャによるミュシャの展覧会ポスターのカットのある頁も展示されたが、この点については以前拙稿⑮で詳しく述べている。大きなポスターではなく、こうした頁からの引き写しではないかという点と、文藝誌でありながら美術と深い関わりを持った『ラ・プリウム』と『明星』の共通性、またラ・プリウム、すなわち羽、羽ペンを示すタイトルであることと藤島による『明星』表紙絵(図2)で羽ペンを持つ女性が描かれていることなどについて述べた。この点については先に島田氏が⑬で「サロン・デ・サン」のポスターが『ラ・プリウム』に掲載されたことを指摘して『ラ・プリウム』との関連がある可能性について述べている。この中では島田氏は『ラ・プリウム』については詳しく述べず、特に『ココリコ』のミュシャによる表紙絵との比較をおこなっている。また今回、⑰の井上氏の論文も、筆者と同じくポスターそのものよりも雑誌に掲載されたポスターの写真を模写した可能性を指摘し、前述の「みんなのミュシャ展」のでも『ラ・プリウム』との関連が展示によって示された。

前述の藤島による『明星』1902年1号の表紙の女性像(図2)は、円の中に女性の横顔を描き、顔の輪郭や髪の毛を太い線で囲んでいる点、やや伏し目がちの視線に、ミュシャの《ビザンチン風の頭部 ブロンド》(1897年)(図3)との共通点がみられるように、やはり従来指摘されたとおりミュシャ風の表現はみられる。⑯で三谷氏も指摘しているが、この縮図は後に述べる藤島の《画稿帖》に含まれている。しかし、雰囲気は似ているものの、『明星』の表紙では女性の頭部に明星のマーク、横顔の背景を塗りつぶして星をちりばめるなど、「明星」にふさわしい装飾を加え、シンプルな二色刷りながら紙の地の部分と印刷部分とのコントラストを巧みに活かして変化に富んだデザインとしている。このように藤島の作品には確かにミュシャを想起させるよ

うなものがあるが、ミュシャ一辺倒であったわけではなくそれを創作の源泉としつつ独自の表現に仕上げている。従来から指摘されてきたように、1900年の白馬会第5回展、1901年の白馬会第6回展にはフランスの広告画が多数展示された⁵。このことは藤島だけでなく当時の画家たちに新しいグラフィックデザインについての視覚情報をもたらした。そこにはミュシャの作品も含まれていたが、ミュシャだけが突出していたわけではなかった。

2. 《画稿帖》について

石橋財団アーティゾン美術館（旧ブリヂストン美術館）所蔵の《画稿集》、《縮図帖》は、藤島武二が自分が目にして関心を持った絵画や資料などを縮図として写し、描き留めてきたことを示すものである。一方、河北倫明、嘉門安雄解説『青木繁 藤島武二』（愛蔵普及版、集英社、1973年）には、もう一つの縮図帖が《画稿帖》（個人蔵）の名前で掲載されており、ごく一部の頁の写真を見ることができる。

筆者も以前この調査を許され、その内容について拙著^⑫で簡単に要点を述べたが、そこでは全体のバランスのために詳しく述べられなかったところもあるため、本稿ではその前半部分について、別表でページの写真とともにその内容を紹介する（図4）。

まず概要を述べる。27.5×20cm、厚さは約1.5cm、表紙は無地で、93頁にわたる。最初のページには春の風景のなかに少女が立っている絵画が描かれている。地形や樹木のかたちは海外の自然主義の作品を想起させる。藤島自身の創作である可能性も否定できないが、全体に均一に図柄の輪郭をとっている描き方からは、西洋画の模写の可能性をうかがわせる。このページの裏には何も描かれていないが、次のページからは海外の広告絵、雑誌の挿図、表紙などを縮図で模写したとみられる図が細かく描かれている。ほとんどは墨描きですばやい筆致で描かれており、部分的にわずかに鉛筆も用いられたり水彩で着色がなされたりしている。全体の筆致からは、若い時期のものともみられるが、制作時期についてはまた後に検討する。模写のもとになったものは、おそらく印刷物や複製画、複製写真などであろうが、文字からイギリス、ドイツ、ベルギーなど多様である。年代が書き込まれているもの、判明するものは、1895年と96年のものが特に多く、遅いものでは1899年から1900年または1901年頃と考えられるものも見られる。

縮図に作家の名前の記載がある場合もあり、そのような例としては、オットー・エックマン、ハンス・クリスティアンセン、フェリックス・ヴァロットン、などの名前を見ることができる。ヴァロットンの版画にもとづく図の原画については、^⑬で井上氏も《画稿帖》を調査して、フェリックス・ヴァロットン《ラリックのショーウィンドー（万国博覧会）Ⅲ》（図5）《カイロ街（万国博覧会）Ⅵ》（1900年または1901年）であることを指摘している。縮図はなぜかその一部トリミングしているので印刷物の複製からの模写である可能性も残されている。木股知史氏は^⑭のなかでヴァロットン《歩く歩道（万国博覧会）》と藤島武二《花ごころ》（図7 藤島の《縮図帖》右頁左上に同図の別刷りが添付されている）を挿図に示し、「明暗の対比や、単純化された人物の表情、衣服の模様の装飾的表現、都市の群衆に視線を向けていること、雨というモチーフなどにヴァロットンの影響が指摘できるだろう」（p.112）と述べているが、この《画稿帖》はまさにその回答となっている。《万国博覧会》のシリーズは1900年のニューヨークの『ザ・センチュ

リー・イラストレイティッド・マンズリー・マガジン』に掲載されているので⁶、藤島がそれを見た可能性もあるだろう。このシリーズの作品の制作年については町田市立国際版画美術館、ニューヨーク近代美術館などで1901年としているものもみられる⁷。

また今回、雑誌『ステューディオ』(*The Studio*)の復刻版を参照したところ、多くの図柄を同誌の中に見いだすことができ、別表にまとめた⁸。前の方の頁には1897年、1898年のものも含まれ、およそ1900年前後の誌面と対応する図があったことから、《画稿帖》が描かれたのも1900年前後であった可能性がある。また同誌には絵画作品の写真も多数含まれているが、絵画の模写はほとんど無く、同誌主催のデザインコンペティションの入賞作品の写真や図を写したものが多数ある。ただし、デザイン画をそのまま写すことはあまり多くはなく、モチーフの一部のみを抜き出して写す場合が多い。つまり、図柄を正確に模写することよりも、興味を抱いた特定の部分部分を自身の覚えとして抜き書きしたようである。

そのなかで特に興味深いのは5ページに《ヴィクトリア女王(12人の肖像)》(1899年)(図6)などウィリアム・ニコルソンによる版画の模写が複数あることである⁹。日本の創作版画の成立過程におけるニコルソンの重要性についてはこれまでも度々指摘されてきた。河野実氏は、山本鼎が「ニコルソン氏版画の形式は明確な線の聚つて成つた濃淡ではなく、唯黒と、白との団であつて構図上の装飾画的線美が其極致であり」(以下略)と述べたことに触れながら、創作版画の出発点とされる山本鼎《漁夫》(1904年)に、「ニコルソンの存在」を指摘している(④、p.275-276)。そしてニコルソンの単純な色面構成、明確な線の美しさを、藤島武二の『明星』挿画《靴なほし》などにも共通してみられると述べている。今回、藤島がニコルソンによる版画を、おそらく複製からながら模写していることは、この考察を裏付ける。

また藤島が『明星』挿画で多用した、白黒の地と図の関係を自在に反転して画面をつくる手法は前述の《画稿帖》に写されているフェリックス・ヴァロットンの版画に共通するものである。さらにもう一人、日本に蔵書票を伝えたとされ、『明星』誌上にもその作例を発表したエミール・オルリクも重要である。筆者は⑫のなかで《画稿帖》に見られる特にドイツ、ベルギー、イギリスの西洋美術の情報源の一つの可能性として、1900年4月に来日したオルリクの存在を指摘する仮説を述べた。

西山純子氏による「日本が見たエミール・オルリク」¹⁰は1900年4月に来日し翌年2月に離日したエミール・オルリクの日本での活動とその影響についての詳しい論考である。西山氏は、オルリクが木版画や石版画を自作し、それを美術作品として位置づけていたことが「日本の創作版画の序章」として重要であったとし、創作版画誕生の流れのなかにオルリクの存在を位置づけている¹¹。具体的には、1904年『明星』辰歳一号にオルリク自刻の《日本婦人と印度人》が掲載され、同年7号に山本鼎による創作版画の初めとされる《漁夫》が登場したことに注目する。一方で、オルリクから藤島への献辞を記した《日本婦人》が藤島の《縮図帖》(石橋財団アーティゾン美術館、旧ブリヂストン美術館)の中に貼り込まれているという指摘も興味深い(図7)。また藤島がオルリクに『宋紫石画譜』を送り献辞を書いていたことも紹介している(図8)¹²。書き込みは以下の内容である。「A MONSIEUR E. ORLIK/ SOUVENIR AFFECTUEUX/ DE T. FUJISHIMA/ FÉVRIER 1901」(E オルリク様へ、心よりの思い出のしるし、T. 藤島より、1901年2月)。藤島が離日するオルリクに日本での交友の記念としてこの画譜を送っていたことが明

らかである。この献辞の字体は《画稿帖》の書き込みの文字ときわめて近い。

1900年パリ万国博覧会のために渡欧した人たちが持ち帰ったり送ったりしたグラフィック関係の資料は1900年秋の白馬会にも出品され、当然藤島も見ているはずである。しかしそれだけでなく、《画稿帖》に記されたような海外の雑誌類から得た膨大な視覚情報があり、なかでもフェリックス・ヴァロットン、ウィリアム・ニコルソン、エミール・オルリクの作品を参照したことは、シャープな描線、明快なコントラストのある表現を創り出す上で重要であったと考えられる。藤島が1901年1月1日発行の『明星』10号以降新しいスタイルの挿画を続々と誌面に登場させた背景には、こうした学習があったのである。

ただし藤島は海外の図を参照しながらも自身のスタイルを創り出していた。^⑫でも少し述べたが、藤島が『明星』10号（1901年1月）に掲載した挿画《春の使者》（図9）が良い例である。この発想源となったとみられるのは《画稿帖》7頁と8頁に含まれる燕と流水、燕が花を加えて飛ぶ図と考えられる。しかし《春の使者》は四角く黒い枠を取り、太い線と細い線でジグザグの波を全体に展開し、そこに大きくツバメを三羽組み合わせ合わせた画面構成であり、全く印象の異なる力強いデザインとなっている。

西洋版画からその特徴を学び、挿画に応用することができたのは、岩切信一郎氏が^⑨で指摘するように、藤島が版に親しみ、版の特性をよく知っていたことによるのであろう。その上でそうした挿画の多くは、西洋版画に学んだことを感じさせず、当時の日本の市井の人々の生活の場面を捉え、生き生きと写し出すものとなっている。単純化したかたちと白と黒だけの色彩でありながら、光と影、人物の動きを描写する。後にそれらだけを抜き出したものを鑑賞用の『明星画譜』として出版し、いくつかは色刷りの鑑賞画として創りなおされている¹³。このことは、これらが独立した作品として意識されたこと、また鑑賞されたことを示す。また藤島が書籍『はな』の扉絵として制作した版画が白馬会に出品されたことについて森氏は、藤島がこれを作品として位置づけていたことを意味すると^⑪で指摘する。藤島の版画は伊上凡骨などの優れた職人が制作したので「自画、自刻、自摺」の創作版画ではないが、意識の上では「作品」であり、西山氏が指摘したように、オルリクが版画表現もまた自己の表現となりうるということ示したことがこうした意識につながったのであろう。

おわりに

今回の『ミュシャと日本、日本とオルリク』展では、藤島による『明星』挿画を多く展示することで、「日本の創作版画の序章」のさらに手前に藤島を位置づけられることを示した。確かに、「版」の表現の可能性を広げ、それを日本のものとして消化する上で、この時期の藤島の果たした役割と影響力は大きく、重要であったと言えるだろう。本稿では紙数の都合のため《画稿帖》の前半のみの内容を紹介しつつ、藤島武二の西洋版画の受容と『明星』挿画制作との関係についての研究の現状を整理するに留まった。また稿を改めて、後半を紹介し、藤島による同時代の本の仕事についても述べたい。

付記 《画稿帖》の調査および掲載をお許しくさいましたご所蔵者に心より感謝を申し上げます。画像のご提供とご許可を賜りました石橋財団アーティゾン美術館にも御礼を申し上げます。また西山純子氏、糸和紗氏には貴重なご教示をいただいたことに御礼を申し上げます。

なお本稿は科研（18K00193）の助成を受けた研究である。

註

- 1 プリヂストン美術館、石橋美術館、日本経済新聞社「藤島武二展」
- 2 東京新聞、練馬区立美術館、鹿児島市立美術館、神戸市小磯記念美術館
- 3 島田紀夫「アルフォンス・ミュシャと日本」p.160。原文は石井柏亭『画壇是非』青山書院、1949年、p.13-14。
- 4 石井柏亭「藤島先生の画業」、岩佐新編『藤島武二画集』東邦美術学院、1934年、p.2。
- 5 出品リストは植野建造編「白馬会展全13回の記録」『白馬会 明治洋画の新風』展、1996年、プリヂストン美術館他、日本経済新聞社、p.184-206。
- 6 『ヴァロットンー冷たい炎の画家』展、マリナ・デュクレ、カティア・ボレッティ編「年表」p.208。
- 7 ヴァロットンの制作年についての現在の見解については千葉市美術館学芸員西山純子氏にご教示をいただいた。
- 8 *The Studio* の復刻版についての情報、およびここに関連するニコルソンの図などが含まれている可能性については糸和紗氏よりご教示をいただいて調査した。
- 9 ウィリアム・ニコルソンについても糸氏より以下の文献をご教示いただいたことに感謝する。
Andrew Nicholson, *William Nicholson, Painter: Paintings, Woodcuts, Writings, Photographs*, Gles De La Mare Pub Ltd, 1999.
- 10 西山純子『ミュシャと日本、日本とオルリク』国書刊行会、2019年、p.289-295。
- 11 この点については文献⑧も p.118-124でも指摘している。
- 12 註9の西山論文の中の註7、Markéta Hánová, *Japonisme in Czech art*, National Gallery in Prague, 2014、p.77。
- 13 これは一枚ずつのものであるが、筆者はこれらを製本した『明星画譜』を所蔵しており収録内容が少し異なる。

藤島武二《画稿帖》の内容（前半部分）

以下、一頁ごとにおよそ右上、左上、右下、左下の順番で描かれている内容の概略と画面内の文字部分を左の欄に述べ右欄に解説を記す。

* *The Studio* に対応する図が見られた場合にはその図のタイトルや説明の後ろに（S: 巻号、発行年月、頁）を示す。

頁	《画稿帖》に描かれた図の概要と記入された文字を記す。文字が読めないところは（?）とした。	図に関するコメント
1	一ページ大に早春らしき花の咲く低木を手前に大きく描き、河辺に女性の絵。西洋画の模写か。水彩で彩色あり。	
2	空白。	
3	上段「ROSE-BUDS」の文字と裸の幼児が楽器を持って行進する隊列。下段、同様の幼児たちが集まっている図。	上段は The British and Irish Spinning, Weaving, and Lace School による刺繍のためのデザイン画（S: no.88, July 1900, p.78.）下段の幼児の絵はコンペティション 1 等賞 “Faithful” の図の一部（S: no.81, December 1899, p.224.）
4	「O-EPΩ Σ-TON/K Σ MON-DIOIKEI」 男女の像、竖琴を持つ天使の男女の子供の像。空を飛ぶキューピット 3 人、18 世紀頃の風俗画のような子供 3 人。	
5	貴婦人（L is for Lady）、散歩する老婦人、男性立像（サインは原画のまま写しているが判読不可）、騎馬人物（N. P. Nicholson）。	右上、左上、左下の順に、“An Alphabet”, “An Almanac: Her Majesty the Queen”（ウィリアム・ニコルソン《ヴィクトリア女王（12 人の肖像）》1899 年『ミュシヤと日本、日本とオルリク』展、3-25a）, “An Almanac: Boating”,（S: no.57, December 1897, p.177-181.）右下は同書 p.180 の J. Pryde による “Portrait Study of W. P. Nicholson.”
6	半裸の女性がキューピットにキスをする図、円の中に裸婦が座り植物模様がそれを囲む図、鈴蘭のようなものを持つ妖精のような人物と羽の生えた妖精らしき図、中世の衣装のような貴婦人、後ろ向きの女性	キスをする図は R. J. Williams による「傷ついたキューピッド」のデザイン画の中央部分（S: no.61, April 1898, p.196.）妖精のような図は「真夏の夜の夢」ペン画イラスト部門のコンペティション佳作 “Pease Blossom”（S: no.59, February 1898, p.63.）右下の女性の図はオーブリー・ピアズレーのドローイング（S: no.62, May 1898, p.260.）左下、後ろ向きの女性はハインリッヒ・フォークラーのエッチング “Frühling” の図版の一部、同書、p.53.
7	右上から「CAKES」と記した人物の図、壺、白・黒のうさぎ、フクロウ、「TALES of the BIRDS」という本の表紙のデザイン、中段に燕と水流、飛ぶ鳥の連続模様、猫とネズミの頭、下段に太陽と飛ぶ鳥のシルエット、曲線によるパターン。	右上の人物と壺の図、鳥の図は本のカバーデザインのコンペティションの佳作 “Jove”, “Me”（S: no. 57, December 1897, p.215.）燕と水流のデザイン、鳥と葉の繰り返し模様は見返しデザインのコンペティション作品。前者は “Penwiper”（2 等賞）、後者は “Seda”（佳作）（S: no.58, January 1898, p.286-7.）ネズミと猫は動物の生態スケッチ部門コンペティション “Honor” と “Veronica”（佳作）（S: no.58, p.289.）
8	木に止まるカラスの群れ、鹿、「VER」の文字のある女性の立ち姿、丸い花をくわえて飛ぶ燕と水流と樹木、飛ぶ鳥、フクロウ、円の中の鳥、鶏、魚。	上段左女性の図は Harry Thomson による光沢のある白ガラスのドアパネルの図（S: no.95, February 1901, p.18.）花輪と燕と水流は Selwyn Image によるデザインを the Royal School of Art Needlework が制作した刺繍のスクリーン（S: no.61, April 1898, p.188.）の一部。これをヒントに藤島は『明星』10 号（1901 年 1 月）に掲載した、「春の使者」の挿画（絵はがきにもなる）を制作したとみられる。下段右の飛ぶ鳥（白鳥か）は “Illustration to Andersen’s Fairy Tales by Miss Alice Horton”（S: no.61, p.192.）の一部のみ写す。飛ぶ鳥（鳩か）は portière 部門のコンペ 2 等賞 “Crows Imperial”（S: no.62, May 1898, p.280.）の一部。

9	花をつけた樹木、アイリス、アールヌーボー風の草花の模様、右下に「Miss De Courcy」。	左上アイリスは、ベルベット地にプリント柄 “Iris d'eau” by Félix Aubert, (S: no.57, December, 1897, p.200.)
10	朝顔、「水仙」のフリーズ、チューリップなどのデザイン	
11	枠で囲った図が5点。風景、外国の街並み、風景のなかの人物、岩のある海の風景画の縮図、「THE SHIP」と書いた船のマーク。	左上は Oscar Paterson による鉛の枠の付いた白黒ガラスのパネル, (S: no.59, February 1898, p.15.) 船は Jessie Malcom による鋳鉄製サイン (S: no.94, January, 1901, p.267.)
12	枠で囲った図が4点。縦長の木立の風景、海浜風景「M. WIELANDT」、横長の森の図、樹木のデザイン「EXLIBRIS」。	上段右、樹木の絵は、スウェーデンのエウシェン王子による “At the Edge of the Wood”, (S: no.57, December 1897, p.163.) 蔵書票デザインはコンペティションの佳作 “Seventeen” (S: no.95, FEBRUARY 1901, p.66.)
13	「H」のデザイン、老婦と若い女性たちの横顔「By “DARDENNE”」、グロテスクな顔6点、座る男女3人「L. MORIN」、両腕を広げるダンサーのような女性が壺から現れる「ARABIAN NIGHTS」表紙 “PAUL”」、光背のある聖女の像(光背:LEOPOLD·DESTRÉVILLE ♥ LEN·FESTEY 右下:H. NELSON)、男性の顔。	「H」のデザインは Awards in “The Studio” Prize Competition B LII, の内 “REX” (S: no. 91, October, 1900, p.72.) 「ARABIAN NIGHTS」は表紙絵コンテスト1等賞 “Paul” (S: no.84, March, 1900, p.142.) 光背のある聖女の像は Harold Nelson による蔵書票 (S: no.86, May, 1900, p.270.)
14	オウム、白鳥、フクロウ、孔雀などの鳥、タンポポのような植物、ライオン、犬、ライオンの子供たち。	フクロウ、飛ぶ鳥は本の章始まりのデザインのコンペティションの佳作、“Nerissa” と “Scott” の一部 (S: no. 82, January 1900, p.297.)
15	飛ぶ蝙蝠、フクロウ、白い鳥、カラス、カエル「OTTO ECKMANN」。	
16	白鳥の図の蔵書票「AMY・FIARY」、泳ぐ白鳥「OTTO ECKMANN」、孔雀の図案「OTTO EC BERLIN」、蔵書票の図案3種: 中央「EX-LIBRIS D'P.W CARD」左「EX-LIBRIS EMIL・UKLES」。	蔵書票には藤島が挿絵に用いた署名のマークがあるので藤島の創作とみられる。蔵書票を日本に伝えたのはオルリクとされている。
17	アーチ状の半円形の飾りの下に女性像が2点左右に並べて描かれ、ミュシャ風である。下右に「PAUL CAUCHIE」の文字。女性の頭部、子供の頭部2人の上に判読不明のアルファベットと1901の文字。	
18	蔵書票2点、上は「F.GÖTZ」、下「F.NIGG」裸の男、母子が森の中に立つ図「OTTO ECKMANN」、下右朱色と墨で羽根飾りの帽子の女性の上半身「DICEMBER」、メデューサのような女性の顔、人物の図柄の蔵書票「F.NIGG/Phantasie FERD.KELLER」。	羽根飾りの女性は Annie McLeish による石版三色刷りデザイン画 (S: no.94, January 1901, p.267)
19	飛ぶ渡り鳥?、フクロウのいる看板のようなもの、蚕など、虫と植物の図案、樹木とフクロウ。	
20	猫3匹「Steinlen」。	スタンランのリトグラフ2点の図版から猫の部分抜き出して模写 (S: no.58, January 1898, p.256-257.)

21	輪になって踊る女性3人、花のフリーズ模様、女性の頭部4つ「HANS CHRISTANSEN」。	
22	女性の図2点、男性と馬「H. JUNKER」、 竖琴を弾く女性（房がついているので箏 篋か？）蝙蝠のシルエット、右手を挙げ る長い衣の女性の後ろ姿。これらは藤島 自身の創作の可能性もある。	
23	パレットを持つ女性「Die Kunst」が竖琴を持 つ女性に手を差し伸べ、右には男女「H. VOLZ」。女性の横顔4つ、女性の頭部と睡 蓮「H. CHRISTIANSEN」、女性の後ろ姿、 頭部、肘をついて座る女性（藤島の《夕》 1904年を思わせる）。	芸術に関する擬人像。
	洋書の表紙をフロッタージュした紙が挟 まる。「LAROUSSE」の辞書の表紙など。	
24	女性の頭部3人、四角い枠の中に女性と動物 の図、竖琴を弾く女性「L. KUPPENHEIM.」、 横たわる女性、女性の上半身、四角い枠の 中に天使のような図。	
25	様々な西洋人女性の顔。一つに「Van dyck」、それと同じ顔の向きの日本女性の 頭部、四角い枠の中にデザインの試行錯 誤か。帽子の女性の横顔など。	ヴァン・ダイクの女性の顔を参考に、日本人女性の顔を描い てみたようである。
26	竖琴3つ。作品縮図「IL NEIGE DES FEUILLE. Lévy・Dhurmer.」、月桂冠のよう な冠の人物頭部、ヴァロットンの版画の 縮図2点「F.Vallotton」。	女性の顔はリュシアン・レヴィ（Lucien Lévy）（1865-1953） の作品。フェリックス・ヴァロットンの図は《ラリックの ショーウィンドー（万国博覧会）Ⅲ》《カイロ街（万国博覧 会）Ⅵ》1901年（『ミュシャと日本、日本とオルリク』展、 3-20、22）と同じ図を一部トリミングしている。
27	1896年2月9日日曜ニューヨークタイム ズ表紙、羊飼いと羊と牧羊犬の図の図 「F.Stott THE FOLD.」、河辺で羊を放牧して 座っている子供の図。	ニューヨークタイムズは、日付と曜日から1896年のものとわ かる。
28	展覧会広告絵「AUSSTELLUNG DES SAEC- HSISCHEN HANDWERKS KUNST GEWER- BES DRESDEN 1896/ DIE ALTE STADT」（水 彩で着彩）、「EMPORIUM/ BRAIO-1896」、 「DRESDEN ACADEMISCHE KUNST 1895」、「SALON DES BEAUX-ARTS DE 1896/ PLACE St PAUL DU 3 MAI 7 Juin/ VILLE DE LIEGE」。	ザクセン美術工芸品展（ドレスデン、1896年の広告）、商業 中心地の広告（1896年）、ドレスデン美術学校の広告（1895 年）、リエージュでの美術展（1896年5月3日-6月7日）
29	Josef Sattler による雑誌『Pan』（1895年）の 表紙（水彩で着彩）。羽を生やし頭に円光の ある天使？が座って胡弓を弾く図に赤い色で 着彩。展覧会広告絵「GROSSE BERLINER KUNST=AUSSTELLUNG/ 29 SEPT/ 1895」	人物画は藤島の創作か、大ベルリン美術展覧会（1895年9月 29日）

30	<p> 豎琴を持つ横顔の女性像のある広告絵「PIANOS, HARMONIUM/ "SCHIEDMAYER, PIANOFORTEFABRIK" / (省略) / STUTTGART」、 「A Pre-Raphaelite Collection/ Goupil Gallery」、ポスター「SIMPLICISSIMUS/ ILLUSTRIERTE/ WOCHEN SCHRIET/ PRIES 10PF/ (判読出来ず) VERIAG MUNCHEN」 </p>	<p> グーピルギャラリーでのラファエル前派展は1896年開催。「ジンプリシスムス」のポスターは Thomas Theodor Heine により1896年につくられている。これらは実際と同じ色彩で写している。 </p>
31	<p> デザイン画数種「MODERNE KUNSTSTICKEREIEN」「DEUTSCHE KUNST UND DEKORATION/VERIAG ALEX KOHN」 </p>	<p> 「近代芸術刺繍」「ドイツの芸術と装飾」 </p>
32	<p> デザイン画数種「OTTO FRIL (?)・HOF/ MUNCHEN」葉に墨を付けて転写「莖ノ葉」「菊ノ葉」、「CARL FABER」 </p>	
33	<p> 莖の花に墨を付けて転写したもの、「四月四日」墨で細い輪郭線を取り薄紅色で桃の花を描く。 </p>	<p> 藤島武二《桃花》『明星』12号口絵は、この桃の図をデザインの的に整えた図柄とみられる。 </p>
34	<p> 広告4種、一部着彩「THE GLASGOW LECTURE ASSOCIATION」「(?) TY GIRL/ (??) EDWARDES'COMPANY」「THE FINE ART AND GENERAL INSURANCE/ BRUXELLES/ VOL DE BIJOUX ARGENTERIES ETC」「A TRIP TO CHINA TOWN」 </p>	<p> 「A TRIP TO CHINA TOWN」は Beggarstaff (William Nicholson と James Pryde によるユニット) によるポスター (衆氏のご教示による)。 </p>
35	<p> 広告4種、「INTERNATIONALE KUNST AUSSTELLUNG/ SECESSION/ OCTOBER/ 9-6-UHR」、「PIANOS/ RUD. IBACH SOHN/ BARMEN」、「PICK ME UP/ STRAIGHT TALKS TO YOUNG MEN No, 1」「FREIE BERLINER/ KUNST AUSSTELLUNG 1893/ ALT MOABIM (略)」 </p>	<p> 「1897年セセッションのポスター」、「自由ベルリン美術展覧会」(1893年) など。 </p>

図1 『明星』8号1900年11月27日
東京新詩社

図2 藤島武二『明星』表紙、
1902年1月号

図3 アルフォンス・ミュシャ《ビ
ザンチン風の頭部 ブロン
ド》1897年、リトグラフ・紙
（『ミュシャ展 パリの夢 モ
ラヴィアの祈り 日本テレビ
開局60年特別美術展』、2013-
2014年）

図4 藤島武二《画稿帖》個人蔵

藤島武二《画稿帖》p.3

藤島武二《画稿帖》p.1

藤島武二《画稿帖》p.6, 7.

藤島武二《画稿帖》p.4, 5.

藤島武二《画稿帖》p.10, 11.

藤島武二《画稿帖》p.8, 9.

藤島武二《画稿帖》p.14, 15.

藤島武二《画稿帖》p.12, 13.

藤島武二《画稿帖》p.18, 19.

藤島武二《画稿帖》p.16, 17.

藤島武二《画稿帖》 p.22, 23.

藤島武二《画稿帖》 p.20, 21.

藤島武二《画稿帖》 p.24, 25.

藤島武二《画稿帖》

藤島武二《画稿帖》 p.28, 29.

藤島武二《画稿帖》 p.26, 27.

藤島武二《画稿帖》p.32, 33.

藤島武二《画稿帖》p.30, 31.

藤島武二《画稿帖》p.34, 35

図5 フェリックス・ヴァロットン《ラ
リックのショーウィンドー（万国博
覧会）Ⅲ》1900年、木版・紙
（『ミュシャと日本、日本とオルリ
ク』国書刊行会、2019年）

図6 ウィリアム・ニコルソン《ヴィクト
リア女王（12人の肖像）》1899年、木
版・紙
（『ミュシャと日本、日本とオルリク』
国書刊行会、2019年）

図7 エミール・オルリク《日本婦人》木版・紙、《縮図帖》石橋財団アーティゾン美術館（旧ブリヂストン美術館）蔵の内。

図7の献辞部分

図9 藤島武二《春の使者》『明星』10号、
1901年1月

図8 藤島の献辞のある『宋紫石画譜』1765年、プラハ国立美術館蔵
(Markéta Hánová, *Japonisme in Czech art*, National Gallery in Prague, 2014、p.77)

